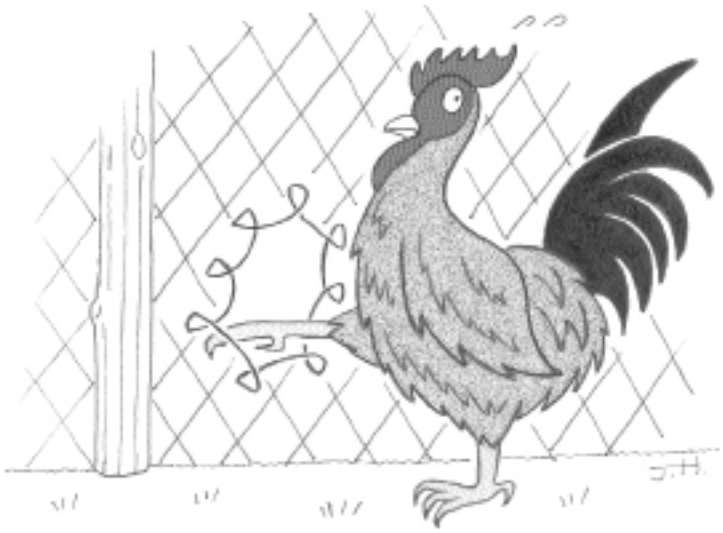
味の記憶

水炊きラバイ

―文学と食を愛するハイパー編集記者・ぼのぼ氏の、わくわくエッセイコラム。忘れられない子供時代の味の数々と共に、昭和の悪ガキがよみがえる



イラスト：服部淳子

〈はじめに……〉
この話の舞台は、昭和三十年代の宮崎県の広瀬という町の公務員住宅。半農半漁で町民の気性は荒い。現在は宮崎市に編入。

〈悪がき連〉
私（6歳）……三人兄弟の末子。父は中学校の教員。2歳の時に一家で広瀬の公務員住宅に越してきた。
兄サダオ（12歳）…「私」の兄。近所の悪ガキ連のガキ大将。
姉マキコ（9歳）…「私」の姉。
ヒトミ（5歳）…保健所員の家庭の長女。通称「銀行屋」といわれる締まり屋さん。
マユミ（4歳）…「私」の隣家の国鉄職員家庭の末娘。吸血ブラッシー・マユミと恐れられている。
マサアキ（7歳）…マユミの兄。「私」の喧嘩ライバル。
ツヨシ（12歳）…兄サダオの親友。喧嘩っ早く「狂犬」の異名をとるが、野良犬猫を愛する優しい一面も。

地鶏のモモ焼きが宮崎名産品になって久しいが、かつては農家の庭先で鶏小屋をもつのは珍しいことではなく、戦後の食糧不足の時代は一般家庭でも、当時は高価な鶏卵を確保するため、庭先で鶏を飼うケースがあった。その名残か、農家を公務員住宅にしたヒトミの家には鶏小屋があり、鶏を10羽ほど飼っていた。保健所に勤めていたおじさんが結核を患って長らく自宅療養をしていたので、地鶏の卵で栄養をつけるためであった。

この地区の公務員住宅は農家がベースで、周りは防風林と畑に囲まれていたので、鶏を飼うには最適だ。霧島山麓産の地頭鶏（じとっこ）地頭鶏（じとっこ）と言われる牝鶏が生む有精卵は、赤みを帯びた黄身が大きく盛り上がり、見た目にも濃厚な味と栄養を備えていた。それをアツアツのご飯にかけて食べると絶品で、たまに私もお相伴にあずかっていた。その鶏小屋ではヒヨコも生まれ、悪ガキ連が可愛いがって飼育していた。もっとも、わが家の飼い猫ミイはヒヨコにとっては天敵で、厳重に防護の囲いを巡らしていた。度重なる箪笥裏でのおっしこ狼藉に加えヒヨコを狙った乱暴狼藉に、おばさんがついにプッツンしてミイに毒盛をしたのも無理からぬことか。

しかし、そのヒヨコも大人に成長し雄鶏とわかれば、無情にもお祝いがある日に食肉として供される。牝鶏でも卵を産まなくなれば、同じ運命を辿る。地頭鶏の炭火焼や水炊きは頭がとろけるほど美味で、人間とは身勝手なもので可愛がっていたことはすっかり忘れ、そのうまさに舌鼓を打つのである。

地頭鶏の水炊きのうまさはそうした身勝手な人間模様も映し出すといえば大げさだが、わが家の広瀬からの慌ただしい引っ越し劇を思い出す。

父はスト決行中

ジャジャジャジャーン、ジャジャジャジャーン……！

聞こえてくるのはベートーベンの交響曲5番「運命」。やたらと大音量ではないか。

今日は母から預かった弁当を父のもとに届ける係。わが家から父が務める中学校までは、お濠と防風林に囲まれた土手を越え、だだっ広い運動場を縦断するだけである。子どもの足でも5分とかからない。目指すは本校舎から離れたところにある音楽教室だ。

木造校舎の教室にはコントラバスにチェロ、バイオリン、フルートにクラリネットやトランペット、トロンボーン、そして太鼓やシンバルなどが並び、教壇近くの譜面台には楽譜が積まれ、黒板には白墨で書かれた五線譜と音符が消し忘れで残っている。壁一面にはクラシックの名だたる作曲家ヘンデル、バッハ、ハイドン、モーツァルト、ベートーベン、シューベルト、ショパンなどなどの肖像が並び、その堂々とした偉容には威圧感がある。それらの肖像画は音楽教室の薄暗くてかび臭い雰囲気に似合い、夜な夜な額縁から飛び出して室内を徘徊しているような妄想を掻き立てさせた。

その音楽教室のガラス窓が震えるように交響曲「運命」が鳴り響いている。父はピアノ椅子に座って、気難しい顔で煙草をくゆらせていた。私にすれば、長髪オールバックでいかめしい髭、相手をぎょろりとした目で睨む父の顔は、音楽室のどの肖像画よりも恐ろしい。

「お父ちゃん、弁当」

「母ちゃんのお使いか、関心じゃ」

と、父は気難しい顔を少しくずし、風呂敷に包まれた特大のアルミの弁当を受け取った。

「母ちゃんには、今日も宿直だからと伝えてくれ」

「うん、わかった」

このところ、父は家に帰っていない。あとで知ったことだが、この頃、父は教職員の労働組合活動にのめりこんでいて、学校側と深く対立し前代未聞のストライキを決行していたのだ。

定番の国旗掲揚や国歌斉唱、また

教育方針などを巡り、揉めていた。そして争議に対して当局のやることは今も昔も変わらない。人事権を発動しての組合員の分断工作だ。最終的に団体交渉はある程度成果を収めたものの、仲間同士の裏切りや、まつりあげたリーダーに責任をかぶせての一部離脱など、その結末は後味の悪いものになった。

父には特別な時に大好きな「運命」のレコードをかける癖があるが、それを大音量でかけるということは、わが家の「運命」を左右するような忌々しき事態が起ころうとしていたのである。暮れも押し詰まった頃のことであった。

俄かきょうだい合唱隊

年明けの門松も取れた頃、わが家に重大ニュースが飛び込む。父の転勤である。珍しく父が早い時間に寿司折りを持って帰宅した。子どもたちは大好物の寿司に大喜びである。

皆が食卓に着くと、

「皆に大事な話がある」

と、父が改まって言った。

「四月から別の中学校に転勤することになった」

「えっー、どこに？」

と、きょうだい三人が同時に聞く。

「鞍岡というところじゃ」

と父が答える。

「宮崎のどのあたり？」

と兄サダオが続けて聞く。

「県の北西の方で、熊本県境に近い。九州山地の山間にある村じゃ」

「えらく遠いところじゃね」

と姉マキコが割って入る。

父の説明が続く。なんでも電線が全村に通って間もないような一等僻地で、冬には2mもの雪が積もった記録もある雪深い村だという。水道は山から引いた簡易水道で冬場はよく凍るとか。ただし、水はきれいで空気も澄んで自然は豊かなところだそうだ。そして、小、中学校は各学年が1学級か2学級と小規模だと、淡々と伝える。これはいわゆる左遷である。

母は、心配していた事が現実になったという顔で、がっくり肩を落とした。広瀬に住んで5年、そろそろ異動とは覚悟していた。次は宮崎市内に戻るのが通常の転勤コースだが、父の場合は組合活動にのめり込んでいただけに、このような報復人事があるのではと心配していたのだ。

兄サダオは四月から中学校進学だ。順当なら地元の国立大の付属中学に通う。付属小では「開校以来の悪童」と言われたが、おそらく進学は無事できるだろうと踏んでいた。それが降ってわいたような転勤の話で、山間の中学校への突如の転校となる。そこが父と母には一番気にかかるところらしい。姉は小学校の高学年への転校、そして私はそこで小学校に入学することになる。

上の二人は急に黙りこくって、学校の同級生との別れの寂しさや、転校先への不安とか、いろんなことが頭の中に去来するのか、食卓に並んだ寿司を食べるどころではない。

幼稚園や保育園に通った経験もなかった私は、小学校へ入学することがどういうことかいま一つ実感できないでいたが、広瀬から引っ越すということは、マサアキやシゲキ、マユミ、ヒトミ、ヒロシ、ツヨシらと別れるということになる。

母はすっかり元気をなくし、沈み込んだ顔をしていた。こういう時は兄サダオの出番である。強引に音頭をとって、夕食の後に恒例の俄かきょうだい合唱隊を結成。当時ＮＨＫ「みんなのうた」で流行っていた「丘を越え行こうよ」や「おお牧場はみどり」などのヒットメドレーを、きょうだいで輪唱し、しめは植木等の「スーダラ節」で、母を元気づけた。

「住めば都というもんね、考えてもしょうがないわ。スラスラスイススーイと」

母もふっ切れたようで、わが家の引っ越しに向けての準備が始まったのである。

地べたで字の練習

三月に入ると、姉の通う小学校から私に呼び出しがあった。行ってみると、ひらがな五十音表と数字の百までが数えられる表を手渡された。母が私の入学の準備のため、学校に相談していたらしい。私は幼稚園も保育園も行っていないので、集団生活がどういうものかわかっていないだろうからと、手引書もくれた。もっとも、そこに何が書いてあるかは私には読めないので分からない。これは母親のために指導用としてくれたものだ。

それから一か月近く、午前中は縁側先の地べたに尖石を使って一人学習。もらったひらがな表と数字表を手本にして、地べたに数字を書きながら百まで数えては、次にひらがな五十音を書きながら音読していく。

7、8m離れたところでは、母がタライに洗濯板を入れて洗濯の真っ最中である。時々、母に質問しながらの学習だ。しかし、母は洗濯に夢中で、こちらの質問には空返事。これでいいかとしつこく声をかけてようやく返事をするという具合だ。

そんないい加減な独学習でも五十音と百までの数字ぐらいはマスターできる。子どもの記憶力は吸い取り紙のようなもので、その頃わが家で流行ったトランプの神経衰弱ゲームに比べたら、お茶の子さいさいだったのである。

次に自分の名前書きの練習。それもすぐに覚える。だが、厄介なのは、書き文字のいびつさの矯正である。地べたに字を書く分には、間違えたところは足で踏みならして消し、さらに大きく描いていけばよいが、これでは文字の配置やバランスもあったものではない。この文字との最初の出合いがたたったのか、未だに悪筆は直らない。

ただ、地べたで大きく自在に書いて練習するのは楽しい。たとえば、地べたで自分の名前の「わ」の文字を書いていると、なんだか「わ」の字の形から恐竜を連想してしまう。そうなると、もう文字書きの練習を忘れて、お絵かきにはまってしまうのだ。

一番の苦手は鉛筆研ぎだ。姉マキコの指導で小刀を先端に合わせて木部と芯を円錐状に削っていく。力の入れようによってはすぐに芯折れしてしまう。不器用な私はなかなかマスターできなかった。すると父が手回しの鉛筆削り器を購入してきてくれて、ここはクリアした。しかし、筆圧が強いせいか、尖った鉛筆芯では字を書くと紙に穴をあけてしまう。HBでは硬すぎて穴が開くからと、やわらかいBの鉛筆を使うと、今度はちょっとした筆圧で芯が折れてしまう。痛しかゆしであった。

そんなわけで、小学校に入って兄のお下がりの、当時まだ珍しかったシャープペンシルを手にしたときは、芯が折れても本体の上部を回せば出てくるので、喜びひとしおであった。

引っ越しの宴

さて、三月も下旬になると子供たちは春休み。わが家は四月頭に引っ越す予定で、ご近所さんが集まって週末に引っ越し祝いをした。庭先に莫蓙を敷いての宴会である。三月下旬は花見シーズンの真っ盛り。中学校の運動場との境の土手に上ると、校庭の桜が見られるのだ。

メインディッシュは冒頭でもふれたように、ヒトミの家のおじさんが地頭鶏をしめて作ってくれた水炊き。

鶏モモのぶつ切りとムネ肉に手羽元と手羽先を材料に作る。七輪にかけた大鍋に水を張り、沸いてきたら先の材料を入れ、白菜や葱、人参と大根、椎茸を加えて、あとはぐつぐつと煮るだけだ。取り皿には、酢醤油にすり下ろした大根と人参と葱のみじん切りを加え、カボスをたらし、七味もかけた、特製もみじダレを用意する。

いかにも弾力がありそうでピンク色に照り輝く鶏肉は、脂が乗って甘味濃厚だ。食感もぷりぷりして、噛むごとに肉汁の旨味がふわーっと口内に広がる。地元産の新鮮でシャキシャキし

た野菜との相性もばっちりで、いくらでも食べられる。しかし、調子に乗るとまたお腹をこわしてしまうので、その日は自分なりにセーブして食べた。入学前だから、少しは自分も成長しているのだ。

子どもたちが集う莫莚には、あのいやしんぼうのマユミは前垂れかけて夢中でぱくついている。ライバルはもちろん兄サダオ。それに負けじとの勢いで、いつもの私の役割をマユミが演じている。その姿をマユミの兄、シゲキとマサアキが心配そうに眺め、動物好きのツヨシは、わが家のミイに持参のてんぷらを分け与えている。ヒトミは自分の父親が作る水炊きが自慢で得意満面。その横にくっついている弟のキュウタは、母親から離れて不安そうに指をしゃぶっている。

「それで、せっちゃん、いつ帰ってくると？」

ヒトミが聞いた。

「引っ越ししたら、当分は帰ってこられんと？」

兄と姉を見るが、黙って椀を見つめている。

「遠くても、年に一度くらいは戻って来られるやろ。な？」

マサアキに促され、

「うん」と私がうなずくと、ヒトミはホッとして、

「じゃあ、来年またみんなで集まって、ここでお花見しよう」

と言った。

「そんときは、また水炊きやね！」

マユミが鶏をほおばったまま割って入り、それを見てみんなが笑う。

空を見上げるとどこまでも青く、校庭から飛んできた桜の花びらが舞っている。その晴れやかな空間で大好きな仲間と、旨い水炊きを食している。

結局これが、この広瀬の悪がき仲間たちとの最後の晩餐ならぬ昼餐となった。以降、彼らがどうしているのか、現在まで会う機会がない。

我が家は予定通り引っ越し、私は山間部の村で小学校に入学するのである。